

健康文化

田舎暮らし10年のわが交流模様 —澁刺たる老年世代—

北川 勝弘

はじめに

早いもので、私が名古屋大学を定年退職した直後に名古屋市内のマンションを引き払い、妻と二人で愛知県東部の田舎町（旧額田郡額田町、現岡崎市中金町）へ転居してから、2015年6月で丸10年経った。名大では長らく農学部林学科で過ごした私にとって、山と森に囲まれた山村地域で暮らしたこの10年間は、森林・林業関係者をはじめ、多くの人たちと交流でき、いろいろなことを学び教えられ、人生的な意味での充足感を味わえて、とても楽しい日々だった。本稿では、それらの交流の中からいくつかのエピソードを拾い上げ、私と同じ老年世代の知人たちの澁刺とした活躍ぶりを紹介したい。

1 わが家のスギ大テーブルとその制作者

私たち夫婦が10年前に引っ越してきた家は、築後11年の中古物件だったので、玄関前からリビングルームの横につながるベランダも、最近では板材の傷みが随所にみられる。そこで、私はその傷んだ板材を自分で修理しようと思い立ち、去る10月はじめ、近隣の町にある製材所にヒノキの長板を20数枚、発注した。その翌日、K社長が早速、長さ4メートル、幅10センチ、厚さ1.5センチの注文品を軽トラックで配達してくれた。Kさんがわが家を来訪されたのは、9年ぶりのことだ。私はKさんに是非とも見てもらいたい物があった。ベランダの中ほどに、長径80センチ、高さ75センチのスギ大テーブルが置いてある。樹齢は約80年。4本の柱を残して中側がきれいにくり抜かれているので、辛うじて2人がかりで動かせる。一つの柱の裏側に「2006年11月19日 ぬかた祭で購入」と、サインペンで記入してある。

このスギ大テーブルの制作者は、他ならぬKさんである。Kさんは、9年前にスギの大木を伐倒し、チェーンソーで中側をくり抜いたものを、ぬかた祭に出品された。それを、たまたま私が破格の安値で購入し、Kさんにわが家まで運んでもらったのである。その数日後、私は偶然、野菜畑で農作業中のKさんと再会した。Kさんはわざわざ私を、スギ大テーブルの原木が伐採された場所へ

案内してくれた。そこは、新東名高速道路の建設予定区域内となる墓地のすぐ脇だった。墓石がたくさん横に並んでいる中で、あのスギ大木を伐り倒した K さんが、並々ならぬ樹木伐倒技術の持ち主であることがよくわかった。

ところで、K さんは 9 年前のぬかた祭の前に、私が購入した大テーブルと同規模の（双子ともいうべき）大テーブルをもう一つ制作していて、製材所の事務棟に置かれ、製材所のシンボルとなっていた。しかし、数年前にその事務棟で火災が発生し、残念ながらテーブルは消失してしまったという。そんな事情もあり、K さんはわが家のベランダに置かれたスギ大テーブルを、懐かしそうに眺め、手で慈しむように撫でていた。

それからしばらくの時間、K さんと私は、スギ大テーブルの前に丸太製の腰掛を引き寄せ、お茶を飲みながら世間話を交した。K さんは、“額田の森林・林業を再生させたい”という“夢”を語ってくれた。

「額田の山を、手入れを全くせんでホカリっ放しにしておくことは、絶対にあかんと思っとる。ワシは昭和 3 年（1928）生まれで、今年、米寿（88 歳）を迎えた。集落の山持ちの中じゃ最年長じゃが、集落の山（山林）を良くするためにワシにできることがあれば、何でもやってやろう、という気でおる。」

かつて、大正時代から昭和後期まで、林業で栄えた額田地域でも、近年では、採算の合わない林業は敬遠され、若い後継者が育たず、手入れの放棄された個人所有の山林が増えている。そこで K さんは、「山林の所有名義を、個人所有から集落の共同所有に変更する」ことを考えた。そうすることで、森林ボランティア等の協力も得ながら、山林にとってその時々に必要な作業（手入れ）を行いやすくできるようになる、と期待される。K さんは今、この自分の“夢”の実現に向けて、集落内の個人山林所有者を説得するために、20 数名の対象者を一人ひとり訪ねて回っているところだという。私も、K さんの“夢”の実現を応援したいものだなと、話をうかがいながら思った。

お茶を飲み終えた K さんは、「ワシはこれから、東三河にある持ち山へ行って、（三河湾沿いの）***町から頼まれた、灯明祭の飾りつけに使う大木を 2 本、伐り倒してくる。」と言いながらベランダを後にした。その大木を先日、ぬかた林業クラブによる「K 氏山林見学会」で実際に見てきたという知人の話では、末口（すえくち；細い方の直径）45 センチ、根周り 2.7 メートル、材長 18 メートルのスギ大木で、価格は 2 本で 120 万円は下らないだろう、ということだった。米寿を迎えてなお澁刺たる生き方を貫いておられる、人生の大先輩だなあと、妻と二人、感嘆の思いで K さんの軽トラックを見送った。

2 段戸の原生林動態調査の牽引者とオールドフォレスター

去る7月上旬、私は旧知のOさんから「オールドフォレスター」宛ての暑中見舞い葉書を受け取った。オールドフォレスターとは、中部森林管理局に統合される以前の名古屋営林局に長く勤務していた職員のOBたちで組織される、親睦団体の通称名である。Oさんは、80代ながら、今でも里山の自然生態に関する調査・研究に勤（いそ）しんでおられる方だ。

「…『段戸モミ・ツガ植物群落保護林』14.32 haの2003年、2005年、2010年に続く2015年の調査は、本年9月1日から11月15日までの期間に実行する予定です。…オールドフォレスターはお互いに、老齡、体力限界となっていますので、我々の調査は今回で終わりとし、13年間及び43年間のデータを集計して、後世に譲りたいと考えます。…」

ここで若干の補足をしておこう。「段戸モミ・ツガ原生林の長期動態調査」とは、1970年代のはじめ頃、当時、名古屋営林局の中堅職員だったOさんが、育林技術を向上させるためには、その基礎となる森林生態の長期的な変化を知る必要があると考え、原生林を対象とした超長期間にわたる森林動態調査を企画・立案され、実施してこられたものである。段戸国有林（愛知県北設楽郡設楽町）内のモミ・ツガ原生林を調査対象地として設定し、基本的には5年ごとに森林の状況を調査する。その内容は、調査地内で一定の太さ以上の樹木について、直径と高さを計測し、記録するもの。背丈の高いササがびっしり生い茂った斜面上で、5年前に計測した樹木を探し出すのも、容易ではない。

「後世に譲る」と書かれた文言の趣旨は、2003年の動態調査以降、段戸原生林での動態調査を、それまでのようにオールドフォレスターのみで行うのではなく、名古屋大学農学部林学科（旧名称）で森林生態を研究対象とする研究室と共同で実施するようになったことを、踏まえている。21世紀初頭の国有林では、累積した行政赤字の解消のため、大規模な機構改革が行われようとしていた時期で、名古屋営林局は長野営林局に吸収合併されると、噂されていた。もしも、そういう事態になれば、長年にわたり取り組んできた森林動態調査が打ち切られてしまうばかりか、貴重な計測結果の資料が雲散霧消してしまう危険性すら起こりかねない。Oさんは、森林動態調査の今後の長期的な継続と、これまで蓄積してきた数十年分の計測結果と今後の調査で記録されていく計測データの集積・保管・分析などを、名古屋大学の研究者に委ねたいと、当時の研究室の責任者（Y教授）に申し出られ、快諾を得たのだった。それ以来、オールドフォレスターと名古屋大学の大学院生たちが共同して取り組んだ段戸モミ・ツガ原生林の動態調査は3回行われ、今回で4回目となる。

9月中旬のとある朝、段戸裏谷の段戸湖脇にある駐車場へ駆けつけた私は、5年ぶりでオールドフォレスターの面々と再会した。10名ほどの参加者は、大きく2班に分かれたうえ、班内での作業も適宜分担して、きわめてスムーズに予定した樹木計測作業を終了させた。さすがは、長年にわたって森林作業を手がけてきたプロフェッショナルたちである。

私が段戸原生林の動態調査に参加したのは、2003年以降だから、たかだか4回に過ぎない。それでも、今回でオールドフォレスターの面々との交流に幕が降ろされるのかと思うと、感慨は無量だ。それにしても、43年間という極めて長い期間にわたり、調査を牽引してこられたOさんの粘り強い努力には、ただただ感服する他ない。Oさんが提起された超長期森林動態調査は、従来の日本林業が抱えていた基礎資料の欠如という弱点を実践的に克服しようとするものであり、極めて貴重である。そして、その調査を長期間にわたり実践面で支え続けてきたオールドフォレスター一同の努力も、実に素晴らしいものだ。

3 ある森林ボランティアと木の駅プロジェクト

2015年5月から、額田地域では「木の駅プロジェクト」が始まった。これは、地域の個人山林所有者に、持ち山への手入れに取り組むきっかけを与えようとするものである。従来は、スギやヒノキの人工林（植栽林）で抜き伐りされた間伐木は、林外へ運び出すことなく、林地にそのまま倒しておくだけ、という取り扱い方（「伐り置き（／伐り捨て）間伐」）をされるのがほとんどだった。これに対して、今回の木の駅プロジェクトでは、県道などに近い所定の場所まで、1～2メートルの長さに切断した材を運び出せば、重量に換算して1トン当たり@6,000円の地域振興券が与えられる、というものだ。

さて、去る8月中旬、私は岡崎年金者組合で面識のあるSさんから、突然の電話連絡を受けた。木の駅プロジェクトとの関連で、自分が知人から手入れをまかされている、額田地域内にあってさほど広くない山林を、一度、一緒に歩いて見てもらえないか、という要請だった。私が木の駅プロジェクト実行委員会メンバーであることを、誰かから人づてに聞かれたらしい。当日、Sさんと一緒に件の山林を歩きながら、私はSさんの関心の的が、「間伐木の選び方」にある、と気づいた。そして、もう一つの懸案は、間伐木の林道端までの搬出。

そこで、9月中旬にSさんから2度目の山林視察の要請を受けた時、私はSさんに、人工林間伐ボランティアグループ「水守森（みまもり）支援隊」の責任者の一人であるTさんにも、一緒に同行してもらうことを勧めた。水守森支援隊は、私が塾長をつとめている岡崎きこり塾の研修講座修了生が組織していて、

木の駅プロジェクトについても、間伐材の林外搬出を手掛けてきた実績を上げている。(ちなみに、私も水守森支援隊の一員として、日程の都合さえつければ、月2回のチェーンソーを用いた人工林間伐作業に参加している。)

9月の山林視察を終えた後、Tさんは、間伐の取り組み方につき、自分の考え方をSさんに伝えた。いくつかある間伐の考え方のうち、樹形の良し悪しで判断する間伐方法には2種類ある。建築用材として木材市場で高く売れる木を抜き伐りする優勢木(上層)間伐と、将来的に優良な建築用材として成長していく見込みのない劣勢木を抜き伐りする事で、林内の日照条件などを改善できると期待される劣勢木(下層)間伐。Tさんの意見は、水守森支援隊ではもともと、木の駅プロジェクトで主対象とされる劣勢木間伐に取り組むつもりなので、Sさん自身には従来通り、優勢木間伐に取り組んで欲しい、というもの。

Sさんは後日、大きな懸案がスムーズに解決してホッとしている、と安堵の表情で話してくれた。間伐で山主に渡るべき収益が、従来に比べて今回、第三者(水守森支援隊)が介在することで大幅に減少してしまわないかと、内心、心配しておられたのだろう。友人の信頼に応えようと誠実に山林整備に励むSさんの姿は、森林ボランティアの一つの典型を示しているように感じられる。

4 ホタルの里の登山道整備と案内看板の制作

私が加入している岡崎年金者組合には、趣味サークルの一つに「軽登山・里山ハイキングの会」があって、毎月2~3回、東海3県や長野、静岡、滋賀の各県の山へ、20~45名規模のバスで、山行に出かけている。私は体力の衰えを自覚するようになった数年前から、月に1~3回の山行に参加している。

さて、一昨年(2013年)の晩秋、岡崎市内で夏には「ホタルの里」として人気の高い鳥川町にある、京ヶ峰の登山に出かけた。1ヶ月後に予定されていた山行本番に備えての、数名による下見の登山だった。一行の山行計画は、七曲古道コースを通過して稜線まで登った後、そこから稜線上を辿って主峰・京ヶ峰(441.8メートル)に登り、愛宕山古道を経て下山する、というもの。

七曲古道は、名前の通り、大きなカーブがいくつもあるのが特徴である。私は、黄葉に染まった樹林の風景に見とれながら歩いていたが、ふと気づくと、登山道の要所要所の道端に、真新しい木製の看板が立てられていた。立ち止まって看板をよく見ると、「ホタルの里 自然歩道」という文字やイラスト、さらに制作者の名前らしき文字が彫り込まれ、きれいに彩色が施されているものもあった。それからしばらく登った時、ふと見かけた看板にビックリ。そこにはなんと、旧知のYさん(岡崎市環境部)の名前が彫り込まれているではないか!

私はすぐにその看板をデジカメ写真に撮り、帰宅後、メールでその写真ファイルをYさんに送った。この通信が、その後、里山ハイキングの会が「ホタルの里・登山道整備活動」に協力するようになる、きっかけとなったのだ。

12月下旬に里山ハイキングの会が京ヶ峰山行の本番を行なった日、下山した一行がトイレ休憩のために岡崎市営の「鳥川ホテル学校」(ホテル資料館)を訪れた時、Yさんが一行を出迎えてくれた。そして、Yさんたちが登山道の案内看板を更新する取り組みを始めた経緯を説明してくれた後、長年、京ヶ峰地区の登山道整備活動に尽力してこられたMさんを、一行に紹介してくれた。

Mさんは70代後半の方で、毎週2回、名古屋市内の自宅から鳥川町の居宅へ通い、木工品制作や野菜栽培を楽しんでおられる。鳥川町内の居宅には、旋盤や各種の工作機械がそろった、手製の工房が作られている。木工などで使う材料の木材は、名古屋で建築業を営む知人から、端材(はざい; 不用となった材)を無償で分けてもらっているという。Mさんが京ヶ峰地区の登山道整備活動に関わり始めたのは、10数年前に地元のホテル保存会の人たちに頼まれて、登山道案内看板の制作を指導した時以来、とのこと。それから10数年が経ち、登山道に立てた案内看板の文字も大半が見難くなってきたので、今回、それら案内看板の全面的な更新が、ホテル保存会で計画された由である。

里山ハイキングの会では、2014年1月の運営委員会で、会全体としてMさんの取り組みを全面的に支えることを決め、同年2月以降、登山道の案内看板の制作と現地設置の作業面で、登山道整備活動に協力している。

鳥川ホテルの里・登山道整備活動が、Mさんのたゆみない努力の結果で成り立っていることは、誰の目にも明らかだ。登山道整備の全体計画の構想立案、個々の登山ルートの細部計画検討、案内看板の材料調達、個々の看板の設置個所に対応した名称決定、文字・イラスト等の準備、等々。よくぞ、ここまで長期間にわたり、ボランティア精神を発揮し続けていらしたものだ。すごい!

おわりに

本稿では4つのエピソードを取り上げ、それぞれの話題の主人公が、老年世代にあってもなおかつ、実に澁刺とした素晴らしい生き方をしておられる様子を紹介した。どの人の生き方からも、感銘を受ける。私も、これらの先輩方を見習って、自分の体力や知力の減退を嘆く前に、自分を可能な限り積極的に活かせる道を見つけ出し、澁刺とした老年期を過ごしたいものだと願っている。

(元名古屋大学農学国際教育協力研究センター・教授)